

(熊毛郡南種子町中之下野大野)

位置と環境

遺跡は種子島の南部南種子町に所在する。町の中心部である上中から南西に3kmほどの標高170m強の海岸段丘の台地上にある。東側に台地と平行して南流する鹿鳴川へ小さな谷が落ち込んでおり、この小さな谷の谷頭に立地する。台地は北に向かって緩やかに傾斜している。

調査の経緯

1990年6月から7月にかけて農免農道整備事業野大野地区に伴って、町教育委員会が調査主体となり鹿児島県教育委員会の協力を得て発掘調査を実施した。確認調査後継続して約600㎡について本調査を実施した。

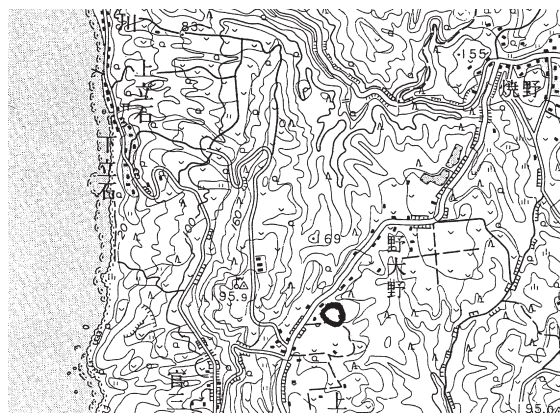
遺構と遺物

野大野A遺跡については、縄文時代後期後半に位置付けられている一湊式土器の単純遺跡である。アカホヤ火山灰の2次層である暗黄褐色土層の上位の黒色土層を包含層とする。

遺構は2基の土坑が検出された。1号土坑は15～16個の石皿・磨石を集積した土坑で、石皿・磨石のほとんどが火熱され赤変している。床面から一湊I式が出土している。土坑の床面・壁面ともに加熱された痕跡はなく、埋土についても焼土は見られなかった。1号土坑と同じ埋土をもつピットが、周辺に11基検出され、上屋があったものと考えられる。石皿類については、単に破棄したものか、地鎮のための埋納など呪術的な性格のものか、実用的に使用されたものか、資料の増加を待ちたいとしている。

また2号土坑は上半分を飛ばされた2個体分の土器を伴う土坑であり、平口縁と波状口縁の浅鉢形土器の大きな破片が重なって出土した。

本遺跡出土の土器は広義の一湊式土器にあたる。2号土坑から平口縁と波状口縁の土器が重なって出土しており、同時期に存在したことを示している。また両者ともに、ふきこぼれ痕と思われる炭化物を付着しており、煮沸用に使われたこともうかがわれる。また無文の土器も出土しておりいずれも口径が小さいことから、一湊式土器に伴う器種として判



第1図 野大野A遺跡の位置

断される。出土土器は、文様の違いによってa類・b類・c類に分類され、型式学的にはa類→b類・c類という流れが想定されている。しかし貝殻を施文・調整にまったく使用してなく、文様帯が省略化され、他遺跡出土の一湊式土器とはやや異なる。遺物は土器のほかは、磨石・敲石・凹石・石皿が出土し、石鏃など狩猟具は出土しなかった。

特徴

一湊式土器は屋久島の一湊遺跡で出土した土器を標識として設定された型式であるが、縄文時代後期の市来式土器と出土することが多く、本遺跡は一湊式の単純遺跡としては初めての遺跡である。分布域も屋久島を中心に島嶼的土器として認識されているこの型式の単純遺跡が、地理的には近いが種子島にあったことも、新しい知見である。一湊式土器は貝殻による刺突文を中心とするシャープな文様で、口縁下部に文様帯を形成する。本遺跡出土の土器はしかし貝殻を施文・調整にまったく使用してなく、一湊II式(1)とIII式(2～4)にあたる。従来不明な点が多かった一湊式土器の様相が、すべてではないが野大野遺跡の発掘によって調整・器形など明らかになった。これは単に薩南諸島にとどまらず、南島の土器編年を考えるうえでも大きな成果であった。

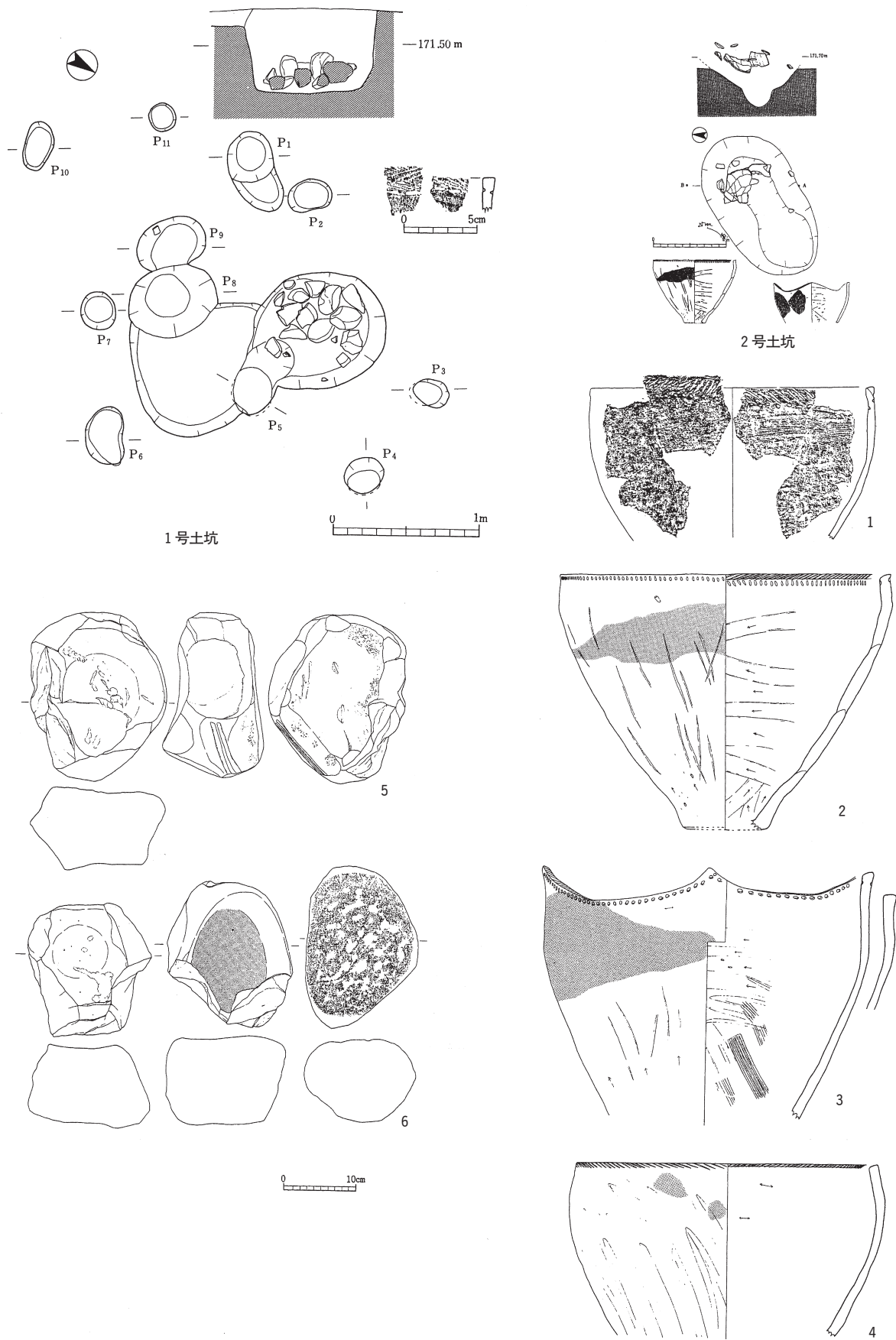
資料の所在

出土遺物は、南種子町郷土資料館に保管されている。

参考文献

南種子町教育委員会1991「野大野A遺跡・上瀬田A遺跡」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書』3

(堂込秀人)



第2図 野大野A遺跡 遺構と遺物